

# 三河アララギ

平成二十三年

四月号

第五十八卷 第四号



## ニューヨーク日記(54) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

January 3, 2011 : View from the Empire state

### Blue Shoe Diaries



長い間住んでいると自分の街でしないことって結構あるよね。もう十何年間か居るのにエンパイアステートビルから夜景って見たこと無かった。何か新年早々縁起良さそうだしお母さんも来てることだしってことで展望台までさむ〜い中行ってきました〜行った価値有りでしょ？この後は今NYで一番美味しいピザを食べながら暖まりました！！なかなか良い夜じゃない？今年が良いことあるかな？

Living in the city, there are a couple of things you just don't get around to doing. One of them has been to see the night view from the empire state building. So despite the cold winter evening, since mom is in town, off we went. And it was worth it, no? After this, we went to Keste to have the best pizza in the city! Awesome evening!

# 目次

## 第五十八卷第四号(通卷六八八号)

表紙・罌粟

ニューヨーク日記(54)

目次

感銘歌・御津磯夫第二歌集「ノボタンの窓」より

歌集・一本の木

春色の空

吉祥の山

蠟梅

終りのない

しきたり

「鬼は外」

冬眠の

冬の山

合掌す

希望

鬼祭り

如月の

味の良くして

祈禱済

氷柱

一番

伝へたきこと

和みをしむ

歩ましむ

凍み透る

冬の大三角

今泉 由利 (1)

Blue Shoe (2)

杉浦 弘 (3)

岡本八千代 (4)

白井 久吉 (5)

今泉 由利 (6)

伊藤八重子 (7)

青木 玉枝 (8)

弓谷 久子 (9)

内藤 志げ (10)

林 伊佐子 (11)

安藤 和代 (12)

胃甲 節子 (13)

伊与田広子 (14)

近藤 映子 (15)

半田うめ子 (16)

清澤 範子 (17)

金津 文枝 (18)

北川 宏廸 (19)

杉浦恵美子 (20)

堀川 勝子 (21)

平松 裕子 (22)

山口千恵子 (23)

小野可南子 (24)

26)

薩埵峠(2)

梅一輪

現代学生百人一首

ことよせ

俳句

私の一首

贈呈誌二月号

和歌から派生した季語の本意(その九)

物理学者と詩歌の世界(15)

鎌田敬止という人(五十二)

絹の話(4)

「氷魚」のことから(123)

ことのはスケッチ(388)

和菓子街道(54)

お知らせ・編集後記・三河アララギ規定

夏目 勝弘 (27)

秋山 逸穂 (28)

伊藤 忠男 (28)

東洋大学編纂 (28)

いーはとぶ (29)

鈴木つや子 (29)

白井 信昭 (29)

植村 公女 (30)

一石 (30)

喜仙 (31)

皓一 (31)

佐々木利幸 (32)

白井 久吉 (32)

杉浦恵美子 (32)

内藤 志げ (33)

夏目 勝弘 (33)

林 伊佐子 (33)

佐藤 喜仙 (34)

鮫島 一石 (36)

今泉 雅勝 (38)

今泉 雅勝 (40)

岡本八千代 (41)

今泉 由利 (42)

平松 温子 (43)

44)

## 感 銘 歌

御津磯夫第二歌集「ノボタンの窓」より

ほろびたる境内なれば歩みつつ枯竹藪をのぞきなどして

P  
163

西古瀬川の小さきたぎちにくだり来て裾の草の実妻ととりあふ

P  
164

歌集 一本の木

杉浦 弘

朝いでて宵おそく帰り来るわれと妻とのかはす言葉いくばく

消え残る雪のあはひにいましたがたもれるばかりのもぐらもちの塚

黒板に記すチヨークのやはらかしあしたより降る春に入る雨

春色はるいろの空

蒲郡 岡本八千代

春色の空の下なりものを干すふたりのものの美しき白

けふもまたけふのみ空の春色よ仰ぎて何も思はざりけり

三ヶ根風窓に鳴る鳴る今日の音授業中の時のかつてのあの音

ひねもすを三ヶ根風が鳴りひびく生徒らと聞きしは何十年前か

「茂吉」読めば茂吉のアララギ「子規」知れば子規のアララギ今夜も愉し

訪れし君らにまたもふるまふは初めての酒「猿庫ざるくらの泉」

その時にあるものそのまま振舞ひて我も一舐めすこの「猿庫」を

春の雨あがりて朝の光りの中修繕成りたるお厨子かへり来

仏壇の備はる処に備はりて扉の新しき黒漆ひかる

煌々と黒光するわが仏壇在すは寛永の御代の法名

## 吉祥の山

新城 白井久吉

八十を過ぎるころより年ごとに体力気力衰へはやし

ふと思ふ三寒四温といふ語句を初めて知るはいつでありしか

いくつかの病もちつつ老いぬれば子どものごとく春を待ちをり

使はざる家具や食器のおほかたは廃品とせむほかに道なし

寒き夜を幾たびも起き寝るごとに見る夢淡く朝に残らず

吉祥の山の麓の入り合にヒイラギとアシビを取りに行くべし

節分を祝ふしるしのヒイラギやアシビも今はまこと少なし

取り壊す古家ふるやの縁の片隅に孫の乗りたるぶらんこがあり

価値のある蔵書は多くなけれども処分する前に目を通すべし

幼くて祖母といねつつ教はりし狐の声は耳元にあり

## 蠟梅

東京 今泉 由利

見えてゐる心になりて原子一個オングストロームといふおほきさを  
あまりにも小さし三つ粒の組みあわせ宇宙も出来た私も出来た

人間の理解の及ばざるところ潜在にありその存在の

描きゐる鉛筆の線の線に似てブラウン運動覚えしこの日

咲きのぼるエンドウの花の白い花白く咲くらん子孫の花も

スペイン語のみ聞こえゐるときありき英語のみ聞こゆ今日の一日

雪が降る昔ながらのボタン雪たちまち積りたちまち融ける

ひと山を尽して香る蠟梅の有毒といひ薬用といふ

おむすびと共に食みたり花の香は毒もつといふ蠟梅の花

やまなみは幾重に幾重に幾重にも振り返りゆく顔振峠

## 終りのない

豊川 伊藤八重子

山に行く息子を案ずる老い二人そのケイタイを頼りとなして

自<sup>おの</sup>が名を下着に書けり大きい文字デイサービスを受くるを決めて

洗濯物干しては取り入れ畳むことこの単純をただ繰り返す

粘土質の土とたたかひ野菜作る婿どのは休日<sup>を</sup>庭に働く

庭畑にビニール被すその下に菜の花見付けし二月の三日

向日葵の種を欲しがるハムスター小さき生きものと暫しを遊ぶ

隣家の屋根より落つる雪解<sup>げくれ</sup>塊音に驚く犬山の家

離れ棲めばつもるはなしも次々とついつい長く逗留したり

終りのない歌とおもひつ鉛筆を握りつづけむわが日日の歌

白菜に豚肉巻きて蒸し煮する白菜鍋作るテレビに学びて

## しきたり

伊丹 青木玉枝

山茶花に触れてポツリと消えてゆく二月の淡雪春待つ淡雪

逢いたき人挙げよとあらばわたしには誰を一番にあげませうか

誰も来ぬ一人の生活窓よりの雀寄り来て話しつつパンまく

いわれなく侘しきひと日は一本の電話の心が心あたたむ

節分会南南東向き寿司を食む伊丹のしきたり太巻の寿司

夕暮れのかそけき光につやめけり散り落ちてなほ赤き椿が

寒波という予報はあれど立春の言葉はぬくしストーブあかあか

歌誌届き待ちし指にて封を切りわが歌の載るページを開く

たつぷりと陽光ひかりの差し入るリビングにわが編みかけのマフラー置きて

六畳の部屋をほどよく散らかして独りの居場所にひとりの時間

「鬼は外」

豊川 弓 谷 久 子

幾年ぶりの追灘の豆ぞ「鬼は外」力いっぱい豆放りたり

闇に向きて投げたる豆が庭石に弾けて確かな音の響けり

厳寒の一月なりき少しだけ春めき来たるか立春の朝

家鳴りする風に脅えつつ眠りたり何時しか音無き朝となりをり

一人の花見今年もせむと来て見ればすでに散りをり奥山の梅

枝先にしほみし花の二つ三つ梅の香の無き梅林に佇つ

ひつそりと木影映して澱みぬし奥山の池埋められぬたり

四百年のとき流れても西方と地名残れる古墨の跡に

たわわなる金柑摘みたり風邪薬と母の言葉を胸に繰りつつ

山下橋を行く人影もおぼろなり御津山白じろ靄に包まる

## 冬眠の

豊川 内藤 志げ

敷下る落葉の中に黒々と土新らしき大きき土竜塚

カーテンを開けし気配に鶉はキンカン揺らし翔び去る早し

降り頻る雪に本宮の山見えず心に描き雨戸を閉す

腰痛め座蒲団を並べ縁側の天井板の模様を眺む

大声に夫を呼びたり動けざり此処に来てよとただ大きき声

ダンボールを抱へて藪を下りゆく児童らに言ふなり火を使ふなど

グイ呑みに少しお酒を継ぎ足して七十八の齢初の日

搔き寄する枯葉とともに掴みたり平たく柔きゴムの感覚

平たきものキューウキューウと小さく鳴く冬眠の蝦蟇起こしてしまふ

動かざる蝦蟇に落葉を寄せ集め厚く重ねぬ春は未だ先

## 冬の山

岡崎 林 伊 佐 子

去年よりも杉の花あかく重くたれ飛散する日の間近くなりぬ

幹太き櫟の榎木を杉の間に長男と孫が立て並べてをく

榎木をく山の傾斜に立ちながら椎茸栽培の年月おもへり

榎木にて尉鷄一羽がさえずれり二月の山の暖かき今日

穏やかな冬の光を浴びながら畑の小屋に白菜の保存

立春を過ぎても更に寒き畑に種まく準備の備忘録をよむ

露地野菜あまた残れるわが畑にブロッコリー好む鴨のむれ

精一杯はたらきてきて手の汗に農具は艶やかにうす光りする

朝日さす雨戸開くればふる里のしら梅しろし古庭隅に

早朝の散歩をするのはわれひとり前も後方も人影を見ず

## 合掌す

豊川 安藤和代

週三日補習を受ける孫のゐて四時の起床もなれてふたとせ

友訪へば遅れ咲きたるひと花の高砂百合の迎えてくるる

けふ入試孫は母の前に合掌すそのお灯りの光やさしき

今頃は理科か社会かと入試なる孫を案じて家事の進まず

如月の身を切る風よ野の道を這うようにして蒲公英の咲く

冷え増して父母嫁の奥津城にせめての心さ湯を供へり

けふは良き事があるのか鶉の声のひときは部屋にひびけり

金柑は好みでないか鶉のたわわなる実の上を啼きゆく

朝食はバアチャン喫茶のバイキングしゃけのおにぎり売れゆきよろし

枯草の間にまに赤き身を見せてスカンポもはや春を待ちをり

## 希 望

豊橋 胃 甲 節 子

春色の淡き花束披露宴のしあわせのお裾分け嬉しく戴く  
一日毎椿の蕾の膨みの見ゆるを吾の希望となさむ

田を起す作業終りて人去れば数多の白鶺鴒は餌を啄ばむ  
春立ちし堤歩めば漸くに小さき蒲公英ほころび初めぬ

暖かき日差しの庭に暫は咲き初むる白梅眺めてゐたり

如月に入り暖かき日二度ばかり散歩に出でて春を予感す

シクラメンの一葉を見たり幾年を触るる事無き古き鉢より

雪のなか桜の枝を翔び交ひて数多の野鳥は東の間に去る

神田川の橋より見下ろす水鳥に混じりて堤に翡翠動かず

翡翠の美しき羽根が輝やきて今日の散歩を幸福にする

## 鬼祭り

豊橋 伊与田広子

知らぬ間に鬼祭過ぎたらし道端に粉撒きし跡あり

道端に粉撒きし跡ありて知る鬼祭過ぎて終ひしことを

以前には遠くより歓声聞えきて鬼祭樂しをわれは知りしなり

痰切りを粉撒き散らし走り行く鬼の道は人集りなりし

痰切りを拾ひて食ふれば風邪引かぬ言ひ伝へあるに競ひて拾ひき

鬼祭までは寒きと云はるるに今年は特に寒き日なりし

鬼祭過ぎたる今日は暖かき暖房入れず一日過ごしぬ

テレビにてシモン・ポツカネグラ初めて見るメトロポリタン歌劇場

わが家は耐震性に優れしと建てしが今はもつと強化さる

農産物全くなくして加工品コロッケや饅頭に化けをり

## 如月の

名古屋 近藤 映子

帰国せし息子は伴侶を携さえて神戸に新居し大阪勤務に

我夫にお嫁さんよと声掛けぬ息子と並ぶ彼女見つめぬ

吾の手を握りてTV見る夫の変らぬ呼吸を感じつつ

発声をしようとすればむせる夫ゆっくり声掛け話し掛け

しんしんと雪降り続く昼下り夫を訪ねる足元あやうし

如月の雪しんしんと降り続き見降す景色真白くまぶし

我夫のベッドの中にも冷たき手足私の手にてさすりてぬくもる

我夫の手足さすりてぬくもれば顔のゆるみて左握手の強し

我夫の視線を背中に感じつつ「又ね」と帰る時刻はつらし

雪止みて舗装歩道に凍り付くバス停迄が遠く思わる

## 味の良くして

新城 半田うめ子

点滴をして貰ひたり犬にかまれて気落ちしたり貧血なりぬ

父の夢見る事のあり時折りに働く姿笑顔なりぬ

病むことの無くて吾が父働くを樂しみたりきやさしかりけり

友よりの知多半島の柚餅子ゆべしなる味の良くして親切なりぬ

届きたる美しき箱菓子折りは横浜の友美味きなりぬ

蜂蜜を持ちて来たりし吾が孫のやさしき行動樂しみてをり

幼き日森の中にてふくろうの鳴きてゐたりき吾が屋敷内

吾が横を氷張り居る音たてて国道なりしオートバイ行く

事故にして右手の脱臼箸もつは左手なりき長き年月

本日も又吾が庭中へ知らぬ人入り来たりてしばらく居りぬ

## 祈祷濟

春日井 清澤 範子

これからも幸せ多く来るやうに節分の豆升に入れたり

一合升に祈祷濟なる豆を入れ家族三人大声に福は内

祈祷濟なる豆をまくなり家族にて口に含めばカリカリの音

吾が庭に跳び遊びくる小鳥らは赤き南天啄ばみて行く

発達したる雪雲続きて吾が庭に今朝も白じろ四度目の雪

八王子神社に詣で柏手を打てば凜とす静寂の中

乗り来たる自転車舞台の横に置き団栗転がる拝殿に進む

願ひごと心に思ひ柏手を打てば小鳩の飛び立つ羽音

夫の弾くピアノノ日毎に曲目の数増して来ぬ吾はくつろぐ

思ひつきり手指開きてまだ閉じてグッパグッパの今日の体操

## 氷柱

島根 金津 文枝

十二月三十一日より雪降りどんどん積り八十糎の豪雪となる

豪雪に足止されたただただに驚くばかり停電は無く

屋根よりかずり落ちそうな豪雪の氷柱長く長く凍みいる

豪雪に墓前の赤実のお供えを鳥等は忽ち食い尽せると

本堂の電飾に光るフルートは曲の調子に光り幾変化

「川の流れのように」美空ひばりの曲に檀家の人の合唱はじまる

縫いぐるみの仔犬は片眼藪睨み胴は青色われを見つめて

何十年朝日新聞の読者なれば配達さんは適え下さる

文芸春秋芥川賞の作品を読む午前0時にて途中迄を

九十才今の楽しみは午後三時ゆつくり湯浴する暗くならない内に

# 一番

東京 北川 宏 廼

「わかな」といふ自分の名前を説明す「和奏」と書いてにつこり微笑む

「遙香」といふ自分の名前を説明す「香」とつけたるは女の子だから

そろばんの一級となりたるご褒美は肉一キロを皆で喰べると

学校で一番となりたるご褒美にアンコールワットに行きたいといふ

コーヒーを炒れて欲しいと思へども妻は韓国ドラマに涙す

母の手の覚束なさを見守りぬのむ、ヨーグルトにストローをさす

楽しさうにも淋しさうにも見ゆるなり母はひとり日向ぼこする

箸の先ほどの小虫が本を這ふ小虫を動かすナノの情報

幼子がクレパスにて描くスカイツリー六三四の先端画面はみだす

あやふやといふやさしさもあるらしいすぢとほすといふやさしさもまた

## 伝へたきこと

蒲郡 杉浦恵美子

この時期になりて私の組の子に伝へたきこと次々浮かぶ

本宮山の彼方に白き山並みを今朝しみじみと眺めて居りぬ

珈琲の湯気二筋の螺旋状に立ち上りゆく朝日に映じて

三年生の最後の考査最終日空席ふたつ入試に行ってる

窓の外櫺の芽吹き眺め居り三年最後の考査の監督

今はもう誰の作かは分からねど清新青春字面に踊る

残り湯の温さに春がほんのりと兆すを感じず節分の今朝

留学生は日本の春を待たずして厳寒の国に帰りてゆけり

十か月日本語の外お茶書道学びてゆけり留学生アンネは

オーロラか白夜か何時の日訪ねむと別るる時にアンネに告げぬ

## 和みをり

豊川 堀川 勝子

うつうつと鬱の字いくつ書き連ね鬱に慣れこし我が二月尽

暖かき日射しの中に届きたり幼「拓真」のバースデーカード

拓ちゃんの便りに我ら和みをり「はるやすみにはあそびにいけます。」

粛しゆくと家事の実務をこなしつつ何故に離れぬ我が鬱ごころ

無理きかぬ老体ながら弟を看る母なりき我が捨ておけず

タンパクとカリの数値を睨みつつ腎にやさしき食材択りぬ

久びさに母と連れ立つ小旅行今日こそは「鬱」忘れ去らむぞ

エビフライを食べつつ見れば今まさにジャンボジェットの飛び立つところ

空港を見終へて帰る道すがら人も景色も朗らかに見ゆ

仕舞ひ湯に肩まで温し温温し失明の危機今日晴れにけり

## 歩ましむ

豊川 平松裕子

兄に引かれ歩むを拒む弟の奏はぎこちなき歩みしてをり

浜砂の上に転べる幼奏の砂を払ひてまた歩ましむ

芽吹き来しモッコウバラの細枝ははつはつアーチに届くまで伸ぶ

懐石の椀の中にはふうはりと師の手作りの鱈のしんじよの

拝見にて回り来たれる香合のうさぎは進む方に向け置く

踏み出だす喜びのあり迷ひありさ庭真白し雪の朝は

雨音と分かるまでの数十秒ひとりの夜に耳そばだてて

雛の持つ扇の房はよれよれなり三十六年の年月経<sup>ふ</sup>りて

真夜中に雛を飾りてゐる我を呆れてゐるもまた我ひとり

次々と出で来る雛の調度多し火鉢長持牛車お駕籠と

## 凍み透る

豊川 山口千恵子

静かなる社殿の前の両脇に狐のよだれ掛赤色鮮か

凍み透る寒さやはらぐこの夕べ塩振りて焼く二尾の小鯛

大楠の枝々くつきり際立たせ赤あか夕日今し没りゆく

白曝れし畑に根付き細々とみどり保てる玉葱の畝

素枯れたるミニ蓮の甕の水に浮く薄ら氷融けず今日一日

地の下に目立たず棲みある生きものの今朝新しき土塚いくつ

白々と鋤き平めし冬の畑にひそみあるらむ春草の種は

水仙と非柿のみの墓華を少し寂しと思ひつつ供ふ

澄み渡る大寒の風に拡げ干す真白大根千切りにして

大寒の陽に拡げ干すま白なる切干し大根甘く匂へり

## 冬の大三角

豊川 小野可南子

遙かなり浅間の山の頂のやや朱をおぶる低き噴煙

月の無き今宵の空の星々よ雄々しく明るく冬の大三角

首すじにあたる朝の日ほっこりとひろいてをりぬ庭の小草を

えんどうの棚に花々咲きつぎぬ蝶みつ蜂の未だまだ飛ばず

徒花と知るや知らずや豌豆の花を揺らせる如月の風

児童等の下校を知らすチャイムなり澄みすむ二月の光あまねし

広縁のカーテンすつきり開けにけり深く射し入る二月のひかり

濃く紅く牡丹の枝のそここにはころび始じむ花芽とぞ見る

「みらいつてナニ」と見上げるつぶら瞳めに如何にいかにや先ずはこの時

我の手をそつと探れる幼き掌一年生になる日も近い

薩埵峠(2)

豊川 夏目勝弘

咲き初めし河津桜の花点点とみつ吸ふメジロは逆さとなりて

万葉に岩城山とある峠路はビワのミカンのいま薩埵山

峠にてビールと握り飯の我が昼食防人達の旅の食事は

絶えるなく車の騒音ひびきくる今の峠は喧しき所

現役のまた赤錆のモノレック枇杷の蜜柑の急斜面の山に

正月の飾りのまだある由比家並あへるは老人と介護社の車

興津より由比まで歩みまだ十一時沼津港にて魚を食はむ

テレビにて知りし食堂に長き列海風ひえびえ露地に逃げ込む

ガリのごと薄きカツオ五切れぞ少し高いが瀬つきとあるゆゑ

富士山の伏流水に大腸菌いでしと言ふも不思議にあらず

「招待」 梅一輪

山裾の杉の林に風吹けど波のごとくにうねることなし

秋山逸穂

はりつめた冷たい風にさらされて我が顔はつきと固まりにけり

足音をたて走り来る少年は防具と竹刀引きずるごとし

よろずごとくまわらぬ歳むかう川崎大師に詣でてみんか

梅一輪にび色の空のもとに咲く香りはまだまだ我にとどかず

伊藤忠男

燃える山揺れる大地におののけりゆき先のない怒りいだきて

卒業より半世紀の過ぎゆけり母校の歴史自らの皺

現代学生百人一首 二〇一〇年編纂 東洋大学

友が降り電車に一人残されて溜め息深く演技終了

東洋大学附属高等学校一年卒業

小崎遥佳

本当になくなることを信じてる「核をなくそう」オバマの言葉

香六代高等学校三年卒業

西谷俊亮

一人ではつくれない顔が一つあるそれは仲間と笑い合うこと

大塚立瀬中学校卒業

渡辺夏海

『いじゆせ』

(西浦公民館 いーはとぶ)

日の暮れの薄きみ空に寒の月ほのぼの白し海辺の西に

鈴木美耶子

新玉の朝に逝きにしおとうとよ庭の蠟梅のかほりの広がり

吉見幸子

ふはふはに生ふるは秋の尾羽根とか孔雀マクジャクはわれに歩み来

牧原正枝

わが生けし一重水仙は床の間に早春の香り漂ひくるかな

岩瀬信子

針箱の象牙の篋へらもルレットもわれのかたへに五十年過ぎつつ

三田美奈子

廃線となるかもしれない蒲郡線けふも通るよ赤き電車の二両

稲吉友江

『投稿』

青あをと菜花茹であるこの夕べ窓にふたたび雪の降り出づ

鈴木つや子

縁ありて十年共に過ごし来しわが犬さくらといつよりか呼ぶ

渦まきて防潮堤を吹きあげる潮の香まじる海に降る雪

白井信昭

ひとしきり雨降りをりし隣家の窓に夕陽の照り返し初む

「俳句」

雉鳩のモンローウオーク春きざす

植村公女

目深にて会釈されたり冬帽子

花びら餅ひとつ残りて暮れゆけり

亡き人を偲ぶ今宵の冬銀河

一石

過去といふ記憶の中に雪が降る

三日月とシリウス1つ冬の空

旧正のお菜さいは畑さいの物ばかり

喜  
仙

料峭りょうしょうや舟ふねならび寄よる夕ゆふつ方

雪煙湖畔から見える男体山

しばらくは枯れゆくなかれ白水仙

皓  
一

夕暮や一輪挿しの水仙花

音たてて山鳩逃げる梅林や

## 私の一首

両膝が疼痛する今朝はゆたゆたと白米棚田の撮影に出る

佐々木利幸

私を取り上げた白米棚田は、能登半島北部の輪島市にある。日本海に向って急斜面の海崖に現れる二千余枚の小水田は希少な風景だとも言われている。今年の七月中旬に心に抱く、心響く暖かい風景を撮影したくて白米棚田に出かけた時の作品である。

今年は喜寿を迎えてから体の機能が衰えてきて居り、腰痛や膝痛が始まり大変苦勞した撮影でもあった。ゆたゆたと好景色である白米棚田の撮影に両膝の疼痛を堪えつつ出かける気持を端的に出したかった。ずきずきする痛みが疼痛。にぶい痛みが鈍痛。この作品に痛みを表現する語句の選択に苦勞したのである。

帰りなば凶鑑によりて確かめむ竹に雌雄のありやなしやを

白井久吉

今年の春、ある席で猪が筍を荒らして困るという話から、「孟宗は大抵大小並んで筍が出る。大きいのが男で小さいのが女である」という人がある。私はそれを聞いて「竹にオス、メスなどはない」と言っても聞き入れない。こんなことで争うこともないので、家へ帰って調べてみようと思ったというだけの平凡な一首である。

調べたところ、雌雄異株はどこにも出ていない。マダケ（男竹）メダケ（女竹）はある。

我の他はだあれも居ない職員室に突風時折書類飛ばせり

杉浦恵美子

どうしても仕上げなければならぬ仕事があつて休日出勤しました。週日は人の出入りや話し声で騒然としている職員室もしーんと静まり返っており、仕事がどんどん捗ります。根をつめて書類書きに没頭していると、細めに開いた窓からの突風が書類を飛ばします。それを拾うために椅子を離れる時がふつと我に返る瞬間です。些細な出来事の描写ですが、案外一首にまとまりました。退職したらこんなことも懐かしく思い出すのではと思います。

橋板にどまん中と書いてあり蓬萊橋を島田に戻る

内藤 志げ

友人に誘はれ島田の帯祭りに祭りの町内まで車で送り迎えをして頂き車の中にて蓬萊橋の話をしていました。帰りに蓬萊橋の袂に車を止めて下さり、大井川の流れば早く下を見れば目が眩む歩み疲れた頃に「何処まで行くの」と後より声。細い橋板の一枚に見落しそうにど真まん中と書いてある。みんなして声を出して読みそこより引き返す。思いも寄らない良い旅となりました。一首に自分の喜びが表現出来たのでしょうか？

梅を干す匂ひただよふ畑道を結びの松の標にしたがふ

夏目 勝弘

罪人となり紀の湯に居る中大兄の許へ曳かれてゆく途中岩代の地霊に祈るため、松の枝を結ぶ風習にならない、有間皇子が結松をしたという岩代の地を見たく当地に行った。

岩代の無人駅に降り、一キロ余り畑中の細い道を行く、目につくのは温室、ビニールハウスの数々、野菜等を作るのではなく、すべて梅を干す場所である。

梅の強い匂ひの漂ようなかを結びの松への標を見つけて歩いて行く。今の岩代の景である。

放置した山畑を今も守りゐるひとつの影となりし案山子は

林 伊 佐 子

ふる里に帰省した時、夕暮れの広い畑に自作した案山子が、二年間古着姿のまま立っている事に心をひかれました。影となる物がなく案山子の姿を「ひとつの影」と詠みました。分りにくい事に気付きました。今、農村では獣対策には、電線と共に綱が高く張られております。昔ながらの生活を楽しんでいるふる里は、案山子を立てて作物を守ってもらう楽しみもなく、案山子の姿は、どこにも見られなくなり、放置した畑も懐かしく思います。

贈呈誌 二月号

「青森アララギ」

平館卓次郎

恙なく吾が越え来たる父母の齢も今宵沁み沁み思ふ

「秋楡」

坪根恭子

ここへ来て一週間の始まりと終わり繋がりくるくる回る

「愛媛アララギ」

芳之内恵

夕されば待つ者もなきに心せきバス停に五分のバス待ちてをり

「鹿児島アララギ」

山下敏郎

狂ひなく時をきざみて十年目壁の時計が今朝は動かさず

「高知アララギ」

尾立かよ

おたがいに年だと笑い合いながら待合室に診察を待つ

「滋賀アララギ」

澤亨

落ち着きてゐると思ひし病院までその半時間の頗る長し

「冬雷」

高島みい子

ときどきは背筋を伸ばし杖の音たてつつ歩む小春日和を

「桜」

若松静栄

険しくも美しき面の阿修羅像火種抱きて吾立ち尽す

「群山」

高田修

冬の日の淡々とさす縁に居ていねむりしをれば夕べとなりぬ

「榎の木」

岸山久美子

体調の整ふ迄は何もできず忘る日々の過ぎ行き早し

歌集「定年」

横山季由

酒をさへ与へておけばそれでよしと吾を蚊帳の外に話しこむ妻

雷なりて降りそめし霰にたたかれてこの冬限りの山茶花の咲く

誰ひとり迎へくるる人をらず生家の軒に巣づくる燕

星きらめく夜空は澄みて吾が去らむ闇に沈める明日香の村を

恩を受け恩と知らざりしかの日々のかへることなし逝きまして今

歌集「季の約束」

富田真紀恵

年の夜の窓に触れつつ過ぐる風行きてかへらぬ音を聴きをり

庭園に据ゑられてをり石ひとつ思想を育てる勁さ見せつつ

今朝よりは風鈴吊りて亡き父母の声を乗せくる風を待ちをり

いつの日の父の黙かも夜の野に櫛一樹は暗く立ちをり

年の逝く時のしづけさ老われにをりをり除夜の鐘が聞ゆる

# 和歌から派生した季語の本意（その九）

「笹」 佐藤 喜仙

24 東風こち（強東風・夕東風・朝東風）

「東風吹かば匂ひおこせよ梅の花あるじなしとて春を忘るな」

菅原道真（拾遺集）

「春日野の萩は散りなば朝東風のかぜにたくひてここに散りぬる」

詠人知らず（万葉集）

西高東低の冬型の気圧配置がくずれて、春型の配置に移行すると、太平洋上から大陸へ向って寒気の緩んだ東の風が吹き始める。

この東風という言葉は主に漁士仲間の呼称であった様である。二番目の例歌に見られるように「万葉時代」には必ずしも春の風とは定まっていなかったようである。道真の歌があまりにも有名になり、爾来早春の風と定まったようである。

例句

夜をこめて東風波びびく枕かな

蛇笏

東風吹くや耳あらはるるうなぬ髪

久女

夕東風のともしゆく燈のひとつづつ

夕爾

25 桜（朝桜・夕桜・夜桜・山桜・染井吉野）

「世の中に絶えて桜のなかりせば春の心はのどけからまし」

在原業平（古今集）

「見渡せば柳桜をこきませて都ぞ春の錦なりける」

素性法師（古今集）

桜は日本を代表する花であり、国花とされている。だが「万葉時代」には梅が主役であり、桜の歌はそれほど多くない。平安朝に入り桜が主力となったが、この頃の桜は山桜、ならびにその変種であった。現在では桜というと染井吉野のイメージが強いが、この種は江戸末期に染井という地でエドヒガンとオオシマザクラを交配して作られた。現在山桜は奈良県の吉野山で栽培されており、多くの人々特に歌人と俳人の人気のスポットとなっている。

例句

見かぎりし古郷の桜咲きにけり

一茶

ひとひらの雲ゆき散れり八重桜

鷹女

夕ざくら髪くるぐろと洗ひ終ふ

七菜子

26 行く春

「花は根に鳥は古巢に帰るなり春の泊を知る人ぞなき」

崇徳院（千載集）

「暮れてゆく春の湊は知らねども霞におつる宇治の柴ぶね」

寂蓮（新古今集）

まさに終ろうとしている春への惜別の情細やかな歌である。季語の中で春と秋とが惜しむに価するとして、「行く春」「行く秋」とはいったが、夏と冬には言わない。「春惜む」「秋惜む」も同様である。

例句

ゆく春やおもたき琵琶の抱きごころ

蕪村

春尽きて山みな甲斐に走りけり

普羅

行春や版木にのこる手鞠唄

犀屋

## 物理学者と詩歌の世界 (15) — エンリコ・フェルミ

一 石

20世紀は「物理学の時代」といわれる。相対性理論と量子力学を誕生させた現代物理学の革命の最前線ではアインシュタイン、ボーア、ハイゼンベルク、シュレーディンガー、パウリ、ディラック、ファインマンなど星のごとく天才が輩出し活躍した。そのような一人としてイタリア生まれの物理学者エンリコ・フェルミ (Enrico Fermi、1901—1954) をリストに加えることができる。

エンリコ・フェルミは早くから数学の才能を見せ、1918年、ピサ高等師範学校に入学し、物理学を学ぶ。ここで早熟な天才ぶりを発揮し、すぐに教師達を追い越してしまった。教師から相対性理論について教えを請われたこともあった。1922年に学位を取得 (参考資料1)。1926年、フェルミが行った最初の貢献は、物質を構成する電子や陽子の振る舞いを解析、「フェルミ統計」に関する理論を発表したことである。フェルミ統計は「パウリの排他原理」(参考資料2)を導入した新しい統計だった。同時期にディラック (参考資料3) も同様の結論を導き出していたため、この統計は「フェルミ・ディラック統計」とも呼ばれる。電子や陽子など、フェルミ統計に従う素粒子はフェルミ粒子 (フェルミオン) と呼ばれるようになった。物質が圧縮され、同一のフェルミオンが近づくと、斥力が働くようになり、それ以上圧

縮できなくなる。このフェルミオンの斥力は金属の熱伝導や白色矮星の安定性など、様々な現象を理解する上での理論的な基礎を与えた。

1926年、20代半ばにしてローマ大学の理論物理学教授に就任。ここで、パウリがその存在を示唆した (当時正体不明であった) 粒子 (参考資料2) が放出されるベータ崩壊の理論を完成させた。フェルミはこの粒子をニュートリノと命名。また、自然に存在する元素に中性子を照射することによって、40種類以上の人工放射性同位元素を生成した。さらに、熱中性子を発見し、その性質を明らかにした。フェルミは卓越した理論家であると同時に、超一流の実験の腕を持った「完璧な物理学者」であった。1938年にノーベル物理学賞を受賞。当時ファシスト政権下のイタリアではユダヤ人追放政策を推し進められていた。妻ラウラがユダヤ人であったフェルミはノーベル賞受賞後アメリカに亡命した。

アメリカでは核分裂反応の研究に従事し、1942年、シカゴ大学で、フェルミらのグループは、世界最初の原子炉を完成させ、原子核分裂の連鎖反応の制御に史上初めて成功した。この原子炉は原子爆弾の材料となるプルトニウムを生産するために用いられた。実験物理学者として彼は否応なく原子爆弾開発競争に巻き込まれていく。アメリカの原子爆弾開発プロジェクトであるマンハッタン計画でも中心的な役割を演じた。しかし日本への投下には否定的であったし、またその後の水素爆弾の開発にも倫理的な観点から反対をした (参考資料4)。

戦後、シカゴ大学で研究職に戻ったフェルミは宇宙に飛び交う高能ルギーの放射線（宇宙線）の性質や起源に関心を持ち、研究を続け、後に「フェルミ加速」と呼ばれる機構を提唱した（1949）。

初期の核物理学者やマンハッタン計画にかかわった科学者・技術者の多くがそうであったように癌により死去（1954）。死ぬ間際まで観察をやめず、点滴のしずくが落ちる間隔を測定し、流速を算出していたという。

彼がイタリアで率い育てた同年代の研究仲間たちは、後にアメリカヤソ連へ渡り、米ソの素粒子物理学の基礎を築いた。

フェルミの残した伝説的な言葉をいくつか挙げる。

○「彼らはどこにいるんだろうね？」

宇宙年齢の長さや宇宙にある膨大な恒星の数から、地球のような惑星が恒星系の中で典型的に形成されるならば、宇宙人（ET）は宇宙に広く存在している可能性がある。ところがそのような高度な文明をもったETとの接触の証拠は今のところ皆無である。1950年に昼食をとりながら、当時多発していた空飛ぶ円盤の目撃談の話を同僚たちとする中でこのような問いを発したと言われる。フェルミが最初に明確な形で指摘したのでフェルミのパラドックスといわれる（参考資料5）。

○「シカゴにいるピアノの調律師は何人いるか？」「カラスは止まらずにどれくらい飛べるか？」「砂浜に砂は何粒くらいあるか？」…

これらはフェルミがシカゴ大学で学生らに出した問題。このようなとらえどころのない量を、いくつかの手掛かりを元に論理的に推定させるこの種の問題はフェルミ推定あるいはフェルミ問題と言われている。フェルミ問題はそれをいくつかの要素に分解して、推定を繰り返して最終結論として概数を求める。最終結論を導くまでのプロセス、思考過程に重きを置いているのである（参考資料6）。

○「知識が前に進むのを止めようとしても無駄だ。知っているより知らない方がいいということは決してない。」

○「（実験には）2つの結果がある。もし結果が仮説を確認したなら、君は何かを計測したことになる。もし結果が仮説に反していたら、君は何かを発見したことになる。」

#### 参考資料

- 1) フリー百科事典「ウィキペディア (Wikipedia)」、エリントン・フェルミ
- 2) 三河アララギ、P. 36、第58巻、第3号（2011）
- 3) 三河アララギ、P. 36、第58巻、第2号（2011）
- 4) ラウラ・フェルミ「フェルミの生涯 家族の中の原子」、法政大学出版局（フェルミ夫人が家庭における夫を描く。本書は原爆開発のインサイド・ストーリーでもある）。
- 5) フリー百科事典「ウィキペディア (Wikipedia)」、フェルミのパラドックス
- 6) フリー百科事典「ウィキペディア (Wikipedia)」、フェルミ推定

## 鎌田敬止という人（五十二）

「月虹」 鮫島 満

白玉書房時代

〈高村光太郎との交流（14）〉

昭和十九年八月から龍星閣を休業していた澤田は二十二年末ごろ、白玉書房から『智恵子抄』が再出版されるちょうどこのころ再興する準備を始めているのである。澤田が「譲渡の意思は全然ないと相当憤慨してゐ」ても、森谷が「澤田君の意思表示の不足と考へられる節もあり、止むを得ない」と書いたところには、澤田が『智恵子抄』の版權を鎌田に譲ったことを示す何らかの根拠があるはずである。それは、書かれたものかも知れず、澤田、鎌田の双方から聞いたことかも知れない。また、『智恵子抄』の再出版の承諾を得た鎌田が『千羽鶴』に切り替えることをこの時期になつて「拒絶する」のも当然であろう。澤田と鎌田の間に立つて「あれこれと焦慮」している森谷に対して光太郎は、

鎌田さんから数日前に「智恵子抄」の再出版の見本を送つて来ましたが、貴下のおてがみによると、澤田さんと十分の諒解が無かつたことが分り、その当時澤田さんの許諾をうけたやうに申された鎌田

さんの言を信じてゐた小生としては、何だかみんなイヤになりました。又当分出版に関係するのは止めようかと考へてゐます。

（昭和二十三年一月十一日付）

と考へを書いてゐる。なにしろ、さきに見た昭和二十二年四月十日の鎌田宛書簡に光太郎は、「澤田さんが龍星閣を再興された暁には何か小生の力を傾けたものをお願いしたい」と書いたほどなのである。つまり、光太郎は『智恵子抄』が鎌田の手に移つたのは一時的なものではなく、二度と龍星閣に戻されることはないとして理解したのである。絶対の信頼を置いていた鎌田に裏切られたと思わざるを得ないことを森谷の手紙によつて知らされた光太郎の衝撃の大きさがさきの手紙には表れている。そこで光太郎は鎌田に対して事の真偽を確かめる手紙を次のように書いてゐる。

此間「智恵子抄」三冊到着したきり、さつぱり様子が分らないので、どうされたかと思つてゐましたが、ねて居られたのですか。もう恢復のやうで結構でしたが、お氣をつけて下さい。（中略）去年六月に「智恵子抄」の原稿をお送りした時は事によると出版不能のやうな事になるかも知れぬと考へてゐましたが、お骨折りで去年中に出版されるやうになりました。出版界の不況といふ事は先日鎌田書房からもききました。（中略）小生は貴下を信用してゐますから無理に一度に印税を送つて下さらなくてもいいです。幾度かに分けて下

さつて結構です。(中略)「智恵子抄」再出版について澤田さんが森谷均氏にフンガイして話してゐたと森谷氏からの手帄の中にあつたので、何か面倒なことが起つたのかしらと案じてゐます。貴下が澤田さんから承諾を得た事と思つてゐましたが、何か行き違ひがあつたのでせうか。(中略)「智恵子抄」二十冊お送りありし由、もうそれで沢山です。

(昭和二十三年一月十九日付)

光太郎らしい気遣いの表れた書簡であるが、澤田との約束の真偽を糺さずには置かないという強さを感じさせる。半ば森谷の手紙を信じているだろうことは、右の末文の「もうそれで沢山です」にも表れている。

この光太郎の疑念を氷解したのは当然のことながら鎌田本人であつた。そして鎌田を扶けたのが鎌田の妻であり作家である野溝七生子であつた。それは、光太郎が七生子に書いた次の手紙によってわかる。

速達おてがミ落手。大変奥さまに御心労をおかけいたしましたすまない気がします。其後届いた鎌田さんからおてがミで事情が分り、その御返事も差出しました故もう御覽の事と存じます。「智恵子抄」の小包も昨日届きました。先日はまるでお便りがなかつたので、何だか様子が分らなかつたのです。澤田さんとの事には小生関係しない事にいたします。鎌田さん健康恢復の由、尚大切に願ひます。

(昭和二十三年一月二十五日付)

光太郎は疑いを解いたのであるが、事情を説明した鎌田および野溝七生子の手紙もそれへの光太郎の返事の手紙も今のところ見ることは出来ず、我々は光太郎の抱いた疑問を解いた根拠を実際には見る事ができないままで今日に至つていた。

しかし、いまここで実物を紹介することには差し支えがあるが、私は、澤田が鎌田に「快諾」を約束した手紙をこのほど発見している。鎌田と妻の七生子がこの手紙の存在を光太郎に伝えたことには疑う余地はないだろう。

鎌田は、光太郎に心配をかけたことを詫びる手紙を次のように書き送っている。二回に分けて挙げる。

○「智恵子抄」白玉書房版発行につきまして澤田さんがフンガイの趣、森谷氏からお知らせがございましたさうで御心配おかけ申上げ残念に存じます。野溝からの手紙では事情を申上げたやうで、先生からも澤田さんのことには御関係されないとのお言葉でしたが、全く澤田さんと私との問題ですから私もわざわざお耳にお入れすることを差控へて居りました。「智恵子抄」の版權については今更ら澤田さんから苦情が出るやうな行きがかりにはなつて居りませんでしたから、昨年末(十五日から二十日頃に亘つてのことですが)爆弾の申入れを受けました時は、澤田さんの精神状態を疑つてみた位でした。

## 絹の話 (4) 「アトリエトレビ」今 泉 雅 勝

### 絹と美人と健康

絹を着ると美人になるのでしょうか。健康を維持出来るのでしょうか。

誰も一番知りたい事です。先月号(3)の機能性の話をもう少ししてか  
らにしましょう。

絹は僅かに色素を吸収する性質が有る様です。ですから昨今は絹を  
パウダ化したり、ゲル化して化粧品に多用されています。保湿性、抗  
菌性、防紫外線性と相まって、肌に優しい親和性があるので、化粧品  
には実に都合の良い素材です。但し絹のどの部分をどのような粒子の  
大きさで配合使用しているか企業秘密です。リンスなどでは明示され  
た物が多くあります。髪が紫外線から守られ、しっとりするからです。  
しかし絹は誰にも万能ではありません。アメリカの学者の発表では  
20万人に1人位、絹蛋白アレルギーの人がいると言う発表が有りました。  
私も30年の間に2人出会いました。

世間で絹を着るとコラーゲンの回復になると謳う宣伝も有ります

が、これは眉つばです。絹はコラーゲンの減少をほんの僅か遅らせる  
ようですが、数値的に捉えた研究は有りません。

絹の着は肌のかく質除去効果があります。絹の繊維を顕微鏡で見  
ると、おにぎり型の繊維ですので、極めて細かなヤスリで肌を撫でて  
いる事になり、不要になったかく質層を取り除き、新しい皮膚に潤い  
を与えてくれます(保湿効果)。絹は一定の湿度が加わるとマイナ  
スイオンを発するので、絹を着るとマイナスイオンに包まれ、ゆっくり  
と健康維持に役立ちます。

絹には優れた緩衝性と難燃性が有り、燃えても有毒ガスを発しま  
せん。絹は防弾チョッキに使われて来たくらいですので、災害に時など  
物が当たっても怪我などしにくく傷ができてても化膿止めに顕著な効果  
があります。傷口に絹の端切を直接当てて、バンドエイドや包帯をす  
ると早く治癒します。

野蚕絹は家蚕絹に比べていずれの機能性も優れておりますし、広葉  
樹林を増やす環境保全に寄与しますので、ご愛用をお薦めします。

絹を食べるとアルコール代謝促進、糖尿病予防、便秘予防、痴呆症  
制御、大腸癌予防等が期待されております(後者3例は実験中)。

絹美人とは肌がつやつやで健康なことのようにです。

## 「氷魚」のことから (123) 岡本八千代

庭の馬酔木の蕾が、やがて白は白、紅は紅の花房になるよう色づいてきた。

子規の死の翌年（明治36年、1903年）に、子規の短歌の伝統を伝える目的で根岸短歌会が発足。その機関誌として「馬酔木」が、伊藤左千夫を中心として明治41年まで続けられた。——しかし、いったん「馬酔木」は廢刊され、三井甲之らによつて「アカネ」の名に代わり、明治41年〜42年の6号まで発行された。

——そうして、また、伊藤左千夫が独自に「アララギ」を創刊したのであった。（同年41年）それ以来、アララギの流派は、明治43年以降、近代短歌の主流ともなつていった。（日本文学の歴史16・現代篇104頁参考）

それゆえか、私は馬酔木の花咲く頃はとくに子規のことを思い出す。今回も、これより、子規の小説「山吹の一枝」のつづきを書き出す。

第八回 果報とや言われん月に渡り鳥

非風稿

「書生たちのやつている投球会のために上野の草原は見物人は山の如く」「わかるか別らぬか商人工人より子供婦人にいたるまでその評判區なり」と。

山西さんという女生徒はみなとちがつて美しい。そして紀尾井が打った玉はそれで、その山西さんの胸に当り、倒れてしまった。（P

87)

そこから、その女を助けるために深和まで出てきて静かな処へつれてくる。

紀尾井は、山西という女を彼女の家まで送つてゆく。ここに二人の出会いがある。かくして、二人は再び逢えたことを喜び、「無極亭」という料理屋に入る。

どちらから追ふともなしに春の蝶

非風

第九回 枯れあしやおとなしからぬ風の声

花ぬす人稿

「君に勧めて更に尽さしむ一杯の酒」紀尾井と山西と酒くみ交わす処。——

そして二人の会話の中に、

・山西は、仏像崇拜を嫌っていた。——

「仏社仏閣毀つべし」。

「日本は暫時、舵なき舟の如き有り様なりき。」。

「女子は自由自在に男子と交際する様にすれば、一挙兩得で、男子も女子も大利益を得るでしょう」。

などと、世の事々に批判的であった。

第十回 おとなしや柳の露の一しづく

非風稿

「其としの暮ることなりき」

三十日午後四時頃、半鐘が鳴りひびいて本郷通りは大火事で大さわぎとなった。そこへ芸者の小松が紀尾井の処へ来て、自分を家まで送つてくれという。紀尾井は送つてゆき、ついに部屋にあがった。

(つづく)

## ことのはスケッチ (388) 今泉由利

### 『きぼう』

高度三百五十キロメートル、大気がほとんど無いところ、一周約九十分で地球を周回しながら地球や宇宙の観測をおこなう有人施設「国際宇宙ステーション」。

アメリカ合衆国、ロシア、日本、カナダ、欧州宇宙機関加盟国十一ヶ国が協力建設中のその日本実験棟の「きぼう」利用成果ミニシンポジウムに参加した。

年度末の故か、研究報告の講演が多く、せっせと参加して学生に戻ってしまったような日々。

今回は、東京国際フォーラム、ガラス棟の中にある会議室で開かれた。

ガラス棟に踏み入って、「ここに来たことがある」。

アルゼンチンのセリーナさんが、アルゼンチン生れの玉由と由野の日本留学中の様子を見に、日本まで来て下さった時。

セリーナさんの、ウルグアイ生れアルゼンチン育ちの知人ラファエル・ヴィニオリ氏の設計、東京国際フォーラムを見に来たのだった。世界各地に彼の建造物は聳えていて、セリーナさんと見上げたことを思い出す。

地下三階、地上七階、巨大吹き抜け、総ガラスを白い鉄骨を支える。透き徹った「ノアの方舟」のような…さすが異国の人の設計、すごい。

大きな外力に抵抗できる耐震は十分に備わっているに決っている。(今度の地震後、すぐ見に行った。何事もなくクールに建っていた)

「きぼう」利用の宇宙実験は、細胞培養装置を用いて、宇宙の微小0.111重力、1G重力、100G重力の三種の重力のもと、ペンペン草の種に水を加え、発芽から種をつけるまでの四十日間の記録。

宇宙重力では、葉は少なく、ひよろひよろしていたけれど実を結んだ。その種がどうなるか？と実験は続く。

ペンペン草は大好きな草だから、とでもうれしく参加していた。

将来の宇宙環境や水分の少ない環境において、効率的な植物生産を可能にするという実験だった。

線虫の遺伝子の操作をして遺伝子治療への応用という研究。

カエルの細胞の無重力でわかる遺伝子の仕組みなど、再生医療への応用が期待される実験。人類を宇宙に順応し安く改造する？のだと理解した。

自分に直接関係ないだろうと思ってしまうことが実験されていて、いつの間にか自分に関係してきてしまっていたり…。

地球の上ではないこと…地球の上のこと…まったく自分に関係のない天文学的単位の中にわり込もうともする実験…なんでもかんでも見とどけよう…。

私の毎日通る所に東京国際フォーラムがあり、ただ見て通り過ぎた日は終り、「きぼう」の実験のこと…セリーナさんのこと…大きくくくらんで身近になって…一人勝手にうれしくて仕方がない。

## 和菓子街道 (54)

<http://www.trad-sweets.com/>

平松温子

伊勢神宮には古くから餅の奉納があり、お膝元のこの地方では昔から“餅文化”が発展していた。桑名から神宮までの参宮道沿いには餅を売る店が多く、別名“餅街道”と呼んだほど。加えて、江戸時代に桑名に隠居した元老中の松平定信が、非常時用に乾米と焼餅を作ることを奨励したため、桑名では焼餅作りが盛んになったようだ。中でも、桑名郊外の安永の集落で作られた細長い焼き餅は、安永餅と呼ばれる名物になった。

東海道沿いの安永には、今はもう安永餅屋はなくなってしまったが、江戸後期創業の柏屋は、桑名駅の側に店を移して安永餅を焼き続けている。安永に佇む柏屋の昔の店の中には、当時使われていた竈や大きな円盤状の鉄板などがそのまま残されている。



薄暗がりの中、安永餅作りの道具に囲まれていると、賑やかだった頃の音や、餅の焦げる美味そうな匂いまでしてくるようだった。

餡を入れた餅を転がして伸ばし、押して扁平にして焼いた安永餅。柏屋では「機械化だけは絶対するな」という先代の教えを守っている。

### ◆安永餅本舗 柏屋

住所：三重県桑名市中央町1-74

電話：0594-22-1197

## お知らせ

▽五月号原稿は、四月一日(金)までに、  
必着、郵送のこと。

※毎月の原稿が、期日までに到着し  
ないと、編集に支障をきたします。  
郵便の休配(日曜、祝日)を考えあわ  
せて早目に送付してください。

※掲載ずみの原稿は、毎月の三河ア  
ララギ誌と共に返送しますので、返  
信用封筒は不用です。

## 歌稿の送り先

東京都北区王子本町一の二六の六A  
〒一一一四一〇〇二二 今泉由利

※原稿用紙は、二百字詰(20字×10行)  
を使用し、文字はわかりやすく楷  
書で濃く大きく書いて下さい。

## 編集後記

▽寒かったこの冬も過ぎて、もう季節は  
春です。裸木の枝々も艶めいて輝いて見  
えます。毎日の暮らしの中に、季節の中  
に、歌の題材に適しい言葉を探して、表  
現してみましよう。暮らしの中からじ  
み出た、はっとする言葉を見つけて短歌  
にしてみましよう。

▽二月二十七日(第四日曜日)に歌会が  
開かれました。十二名の出席があり、活発  
な批評、感想、意見など出され、作者自身  
では気付かない内容の矛盾なども指摘  
されて、なるほどと納得することも多く、  
大変有意義な歌会となりました。(山口)  
△稲石せき、安藤和代、今泉功、今泉みや  
子、岡本八千代、(敬称略)。ご寄付をいた  
だきました。三河アララギの発行費とさ  
せていただきます。(会計 小野)

## 三河アララギ規定

◇「三河アララギ」に短歌を寄稿する者は、「三河ア  
ララギ」会員であることを必要とする。  
◇規定の会費を送金すれば、すぐに会員になることが  
できる。

◇会員には毎月歌誌「三河アララギ」を送付する。

◇会費は、平成十年一月一日より、半ヶ年分二万円、  
一ヶ年分三万円の割で前納されたい。ただし、購読会員  
は、半ヶ年分二万円、一ヶ年分四万円とする。

◇会員は、住所変更の際は、すみやかに通知せられたい。  
退会の際も同様ただちに連絡せられたい。なお、退  
会の際の既納会費は、返戻しない。

◇会員は、発行所開催の諸会合に自由に出席すること  
ができる。

◇会員は、短歌・その他論文・随筆等を送稿すること  
ができる。毎月一回一日締切り厳守。なお原稿は一切返  
却しない。ただし返送希望者は返信封筒の同封があれば  
お返しします。

平成二十三年三月二十五日印刷 第五十八巻 第四号  
平成二十三年四月一日発行 定価 六 百 円

### 編集部

岡本 八千代・小野可南子・夏目勝弘

### 発行人

平松 裕子・山口千恵子

### 発行所

今泉由利  
三河アララギ会

### URL

三河アララギ発行所 〒四四二一〇三二一  
豊川市御津町御馬西三七  
TEL (〇五三三)七五二〇〇九  
振替口座 〇〇八三〇一六・五六三二九

### 印刷所

E-mail yun88@cronos.ocn.ne.jp/  
Homepage <http://maizumiyun.jp/>  
株式会社 桜創美